

岩鼻通明 著

『出羽三山 山岳信仰の歴史を歩く』

岩波書店（岩波新書） 2017年10月 219頁
900円＋税

近年、歴史地理学会会員の著作が大手の出版社から、新書版で多く出版されている。歴史地理学の成果あるいは「見方・考え方」を、広く世間の方々知っていただく良い機会であろう。この度、岩鼻通明会員の単著が岩波新書として出版された。岩鼻通明会員の単著としては5冊目である。出羽三山に関する著作としては、博士論文の『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』（名著出版）をはじめとして4冊目にあたる。

本書の構成は、下記のようになっている。

はじめに—山岳信仰とは何か—

第一章 出羽三山の歩み

第二章 出羽三山参りと八方七口

第三章 羽黒修験四季の峰

第四章 出羽三山を歩く—絵図を手がかりに—

第五章 湯殿山と即身仏—「一世行人」の足跡をたずねて—

第六章 山岳信仰と食文化

おわりに

あとがき

主要参考文献

図表出典一覧

「はじめに」では、山岳信仰を理解する上で重要な、「擬死再生儀礼」・「山林斗擲」・修験者と山伏・役行者（役小角）・神仏分離・本山派と当山派・里山と奥山など用語を簡潔に解説している。さらに、同じ用語であっても時代によって異なった意味内容があることにも留意を喚起している。たとえば、出羽三山と称しても近世以前は、三山の1つが湯殿山ではなく葉山であったことが指摘されている。なお、出羽三山の各山岳が庄内地方の漁民にとって、「山アテ」の対象となり、豊漁祈願の対象になっていたことを知ったのは参考となった。

第一章は、出羽三山の歴史について、古代から中世・近世・近代そして現代に至る様相が述べられている。評者が感心をもった部分は、「出羽三

山の変遷」の項目である。出羽三山信仰の対象の山岳は、当然羽黒山・月山・湯殿山であると思っていた。しかし、その信仰対象の山岳も時代とともに変化していたことは、大いに興味をもたれた。すなわち、月山・湯殿山とあまり聞き慣れない葉山の3つの山、あるいは月山・羽黒山・鳥海山の三山を信仰対象とした時期、と時代の推移によって信仰の対象山岳が変わっていたことである。そして、その推移の要因として、宗派間の関係の宗教的要因と参詣ルートに関わる地理的要因とが指摘されている。

第二章では、出羽三山の信仰域と参詣路に関して記述されている。この章は、まさに筆者の博士論文（『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』）の骨子にあたるといえる。最初には、信仰域の地域的側面に関して、出羽三山周辺地域のミクロ的意義と東北・関東地方におけるマクロな視角から述べられている。前者に関しては人生儀礼と年齢との関連から同心円的鉱造が、後者の地域では「講」・「霞」・「旦那場」といった宿坊との関連が指摘されている。

また参詣路については、松尾芭蕉の事例を挙げつつも、各地に残る道中日記から参詣路の循環的行程の存在に注目している。次章で指摘されている出羽三山の各山岳が、過去（月山・阿弥陀如来）・現在（羽黒山・聖観音）・未来（湯殿山・大日如来）と対応することと関連して、参詣ルートと過去・現在・未来といった時間軸との関わりにも多少なりとも言及があっても面白かったのではなからうか。たとえば松尾芭蕉の場合は、羽黒山（過去）→月山（現在）→湯殿山（未来）→月山（現在）→羽黒山（過去）の順路で参詣しており、地理的視点のみならず時間的意識の面からも筆者のいう「循環的行程」が表出されている、と見なせられないだろうか。

第三章は、羽黒の修験者にとって極めて重要な儀礼である「峰入り」についての説明の章である。「峰入り」は、修験道における入門儀礼であり、より上位の資格への修行である。この修行は、春・夏・秋・冬の4回の「峰入り」が行われている。春の峰で興味深い点は、歳夜の験競役が12支を意味する12人で、修正会の験競役が10千を意味する10人で行われていることである。これは、まさに「十千十二支」の時間に関する世界観

の表出として考えられる。夏の峰は、旧暦の4月3日～8月8日までの行で、夏山開きとの関連があるとしている。秋の峰は、8月下旬1週間行われ、まさに入門儀礼・資格向上のための重要な修行とされている。その様相も詳細に紹介され、3段階に及ぶ内容が述べられている。冬の峰の松例祭は、羽黒山麓の手向内の8つの集落を上半分(位上)と下半分(先途)とに二分し、豊作あるいは豊漁かを祈願する祭りである。この行事は、全国66ヶ国を羽黒の東33ヶ国、熊野の西24ヶ国、英彦山の九州9ヶ国に分割する修験道の世界観とともに、地理学的にも関心を有する内容である。

第四章は、まさに歴史地理学の「見方・考え方」の楽しさが理解できる章といえる。前半では、現在の出羽三山信仰の対象となっている羽黒山・月山・湯殿山を巡る参詣路を、写真と地図を併用しつつ紹介している。興味をもった部分は湯殿山の記述で、地理学的に内陸側と庄内側の分水界にあたる「装束場」が、宗教学的にも天台宗側と真言宗側の祭祀権の境界に相当する、との指摘である。まさに、下部構造と上部構造との関連を意味するものである。

後半は「湯殿山月山羽黒三山一枚絵図」を読むとして、そこに画かれている図像と文字情報から現地比定とともに、図像の宗教的景観の対照的構造と宗教空間の聖性などが指摘されている。絵図の左下からジグザグに右上に、羽黒山から月山を経て湯殿山に至る配置は、筆者のいう宗教空間の聖性とともに、過去・現在・未来をも表出されているといえ、過度の憶測になってしまうのであろうか。絵図の部分ごとの分析・解釈の叙述に、大縮尺の地形図が添えられていれば、理解が一層容易になったと思われる。

第五章では、即身仏に関して神仏分離や回峰行、小説や道中日記などをあげつつ紹介している。宗教にほとんど興味をもたない評者としては、湯殿山における山籠の行者と近在の信者のサ

ポート体制が述べられている部分で、信仰と地域社会との結合を示す1つの重要な内容になる。

第六章には、出羽三山信仰の修験者・行者・参詣者の修行に伴う食事が紹介されている。評者が興味をもった点は、立山信仰と売葉の地域割りが各宿坊の旦那場との関連を指摘した部分である。評者も、大学院生時に故菊地利夫・故千葉徳爾両先生の下で実施された「歴史地理学実習」で、手向集落の1つの宿坊に残されていた冊子状の古文書を筆写した。翌年の春の日本地理学会で口頭発表した際に、各宿坊が有する霞場・旦那場の集落が異なり、札などの配付権が関連していたことが思い出された。

「おわりに」では、副題にもあるように現在および将来の出羽三山地域の存続と発展について述べられている。出羽三山信仰に関わる文化と歴史の現代的意義としての地域振興といえる。

1冊の単著を叙述するには、それまでの研究の蓄積とともに、大変な労力が必要とされる。その意味では、すでに数冊の単著を世に問われている筆者には多大な評価を認めたい。

最後に、「はじめに」の部分から出羽三山に関係する地名が記述されているが、各山岳や肘折(図4-11)・志津(図4-11)や大井沢など村落の位置関係を知る上でも、早めに図を提示されるか本文中にその村落の位置を示した図の提示が望まれる。特に、土地勘のない読者に対しては親切であろう。確かに本文には多くの写真や史料が提示されている。しかし、地理学の楽しさを知ることからすれば、地図類の提示が少ない印象を受けた。

第三章と第四章とを前後逆にしても良かったのではないかと感じた。そうすれば、出羽三山の歴史面(第一章)、歴史地理面(第二章、第四章)、宗教面(第三章、第五章)そして文化面(第六章)の順になる。つまり、出羽三山信仰の推移と場所を舞台とした宗教と文化が、より一層明瞭になったのではと感じられた。

(古田悦造)